



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	キエルケゴールに於ける「建揚」の概念の発展
Author(s)	渡部, 光男
Citation	基督教学, 13, 125-135
Issue Date	1978-09-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46341
Type	journal article
File Information	13_125-135.pdf



キエルケゴールに於ける 「建揚」の概念の発展

渡 部 光 男

序 目的と方法

迷路のように入り組んだセーレン・キエルケゴールの著作活動に於て、いわば日の当る「前面」の部分と、影になった「背面」の部分との弁証法的二重性が存在する。概略に言えば、仮名の『これか、あれか』、『回復』、『おそれとおのき』、『不安の概念』、『哲学的断片』などのいわゆる「美的著作」の影には実名の十八篇の『建揚的講話』が存在する。しかもこの二重性は『後書』を契機に「前面」と「背面」が交代し、「建揚的著作」もしくは「キリスト教的著作が「表」となる。さらに細かくみればその二面の著作群相互に弁証法的な対話が構成されている。例えば『回復』（一八四三年十月十六日刊）に於ける「ヨブ記」の取り扱いと、『四つの建揚的講話』（一八四三年十二月六日刊）の「ヨブ記」のそれとの間には美的な伝達と倫理—宗教的な伝達との対話が認められる。そこで、この小論では初期から後期のキエルケゴールの思想をつらぬく一本の導きの糸として、「建揚」の概念を取り上げ、それを思想的発展の相のもとに理解することによって彼の思想の深さを例証することが目的とされる。

とりあえず用語の問題を整理しておきたい。キエルケゴールの用語 *Opbyggelse* は、「あくまでも個々の人間に主

体的に働きかけ、個人的人間の実存を、神との関係に於て、ゆさぶり目覚めさせ、内面化させることを目指す⁽¹⁾と規定されている。デンマーク語の op-bygge (ドイツ語では erbauen 又は aufbauen にあたる) は op (上に) bygge (建てる) の合成語であつて、Opbyggelse はその名詞形である。邦訳者はこれの訳語に困り、「建徳」とか「教化」と訳しているが、どなたも満足していないようである。小論では「建徳」とするにしても「徳」がキエルケゴールの倫理思想にそぐわないと理解し、「建揚」と訳すことにした⁽²⁾。この場合ヘーゲルの「止揚」(Aufheben)を横目で見ると点でも有用であり、しかもキエルケゴールに於ては「揚げる」とは「深める」ことを意図している点でも有用である。こうした理由で本小論では Opbyggelse に対して「建揚」と言う訳語が統一的に用いられる。

キエルケゴールに於て、「建揚」と言う語はいまだ概念化されないままに、『イロニーの概念』(一八四一年)や『これか、あれか』(一八四三年)第一部に散見される。彼により意図的に「建揚的」として概念化され、はじめて著作に出現するのは『これか、あれか』第二部に於てである。そこでは次のような思想が建揚的とされている、つまり、人間が神に対して常に不正だと言う思想は「建揚的」であり、「この思想は二重の仕方で建揚的な力を示す、その一つはこの思想が懷疑を阻止し、懷疑の苦悩をしずめ、他の一つは、この思想が行為へと及ぶことによって⁽⁴⁾」である。何故なら「建揚する真理のみが君にとって真理である⁽⁵⁾」からである。こうして実存のカテゴリとしての「建揚」が登場する。それは本来的に倫理―宗教的概念であつて、キエルケゴールに於ては初期著作から後期にいたるまでたどらえ得る貴重な導きの糸であり、それなしには真のキエルケゴール理解が成り立たないものである。

キエルケゴールに於ては「建揚」と言う概念は(「建揚的」も含めて)、はじめは曖昧に「倫理―宗教的な」象面に於て、ついで、『後書』以降では、宗教性A、宗教性Bの象面で、ついには宗教性Bからの還相面に於て使用されている。つまり「建揚」には四つの段階があるわけである。従つて我々はそれぞれ順に(一)倫理―宗教的建揚、(二)宗教性Aとしての建揚、(三)宗教性Bとしての建揚、これをキエルケゴールは「逆説的『建揚的なもの』」(det Paradok-

Opbyggelige⁽⁹⁾と呼んでいるが、(四)宗教性Bからの還相的建揚と呼ぶことができるであろう。こうした「建揚」の概念を發展史的にやや細かに追求することとする。

一、倫理—宗教的建揚

キェルケゴールの実名で刊行された十八篇の『建揚的講話』は権威なしに語られ、説教ではなく、たんなる「講話」であって、さらに「建揚のため」(til Opbyggelse)ではなく、「建揚的な」(opbyggelig)講話であるとされる。これは後期の著作である『キリスト教的講話』(一八四八年)の第三部では、「建揚のための」と明記され、さらに『死に至る病』(一八四九年)の副題が「建揚と覚醒のために」となっていることから意図されていることは明白である。キェルケゴールの説明によれば、「建揚的」は詩人としてのカテゴリーであり、それは倫理—宗教的段階に立つ思想の表われである。⁽⁷⁾「建揚的なもの」には、キェルケゴールの規定としての「キリスト教的なもの」が、例えば、罪、罪のゆるし、神との和解、時間に於て出現した神、逆説、などが、本来の実存的信仰に裏打ちされて取り扱われている⁽⁸⁾のである。従って建揚的と言う性格は、キリスト教的と言う性格よりも広範囲である。⁽⁹⁾

まず『建揚的講話』(一八四三年～四四年、便宜上十八篇を年代順に番号をつけた講話として取り扱う)に於ける「倫理—宗教的建揚」の概念を吟味する。ここに於て認められるものは美的著作(『これか、あれか』(一八四三年)、『回復』(一八四三年)、『おそれとおのき』(一八四三年))に対する一段と發展した倫理—宗教的な視点からの、より大きな、より内面的な、一貫した実存分析が試みられている。⁽¹⁰⁾つまり「倫理—宗教的建揚」は美的実存の現実⁽¹¹⁾に於ける矛盾、もしくは設問に対して、宗教性Bへとやがて發展して行くであろうところの「進路」を指示するのである。一八四四年の段階では、倫理—宗教的なものと、宗教性Aとの区別は、まだ曖昧であるが、ここでは一応『建揚的講話』までの過程で考えておくこととする。それが指示するものは広い意味での信仰(宗教性)である。『建揚的

講話》の出発点は、建揚的なものの中に、従って一般的—人間的なものの中にある。⁽¹¹⁾ あるいは、「建揚は宗教的実存に生きるための入門的前提である。」⁽¹²⁾ 「建揚は個人的な心の流出となんの関わりがない、と言うのは、建揚はわがものにするべきだからである。」⁽¹³⁾

ここで十八篇の講話の内容を概観し、「倫理—宗教的建揚」の概念の肉付けを試みることにする。第一講話（一八四三年五月）に於ては「信仰の期待」と題して、キエルケゴールは美的な時間理解に対して「永遠」を対置する。信仰は未来を志向し、超越せる神への信頼にみちた理解であり、信仰はその無限性が無限なものと交わる一つの情熱であって、実存の真理に対する覚醒である。⁽¹⁴⁾ ここでは「信仰は永遠的なものに対する応答性であり、実存の退屈や欲求不満をのりこえて、永遠なものの約束に達することを選んだ自己の力動的表現である。」⁽¹⁵⁾ 第二講話（一八四三年五月）は『これか、あれか』第二部の倫理観の批判である。倫理の実存の限界は苦難である。人間は倫理的苦難を人間的に解決することはできない。信仰に於て苦難は神の賜物として受け取られ得て、はじめて克服され得る。⁽¹⁶⁾ このようにキエルケゴールは賜物としての苦難と、罪の結果としての苦難の両面から「倫理—宗教的建揚」を理解している。第三講話及び第四講話⁽¹⁷⁾（共に一八四三年十月）は『回復』や『おそわれとおのき』に於ける問題提示に対する一種の「キリスト教的」な解答を示している。⁽¹⁸⁾ ここでは神の愛は人間の悲劇や罪に対して勝利し得、魂に精神的な強さを回復させ、悔改めが必要であることが示される。第三講話に於ては「完全なもの」としての宗教性、第四講話に於ては「不完全なもの」としての罪、特に「罪ある女」の像が取り扱われる。第五講話⁽²⁰⁾（一八四三年十月）のテーマは「内なる人の強化」であって、『回復』によっては見出されなかった宗教的慰めを表し、絶望している魂は、神に対し自己の苦難を感謝するならば、取り戻され、力づけられることが強調される。「精神」としての神との関係の中で、実存は「外的状況」としての客観性にもかかわらず、主体的内面的な人間として自己の自由を保持し得るのである。第六講話⁽²¹⁾（一八四三年十二月）に於ては、明らかに『回復』に於て取り扱われた「ヨブ記」と対照的に、ヨブの状況の

実存分析が示され、ヨブの苦難は信仰に裏打された希望へと通じることが語られている。倫理―宗教的建揚はこのように苦難と希望の間にはりわたされている。第七及び第八講話⁽²²⁾（共に一八四三年十二月）は同じテーマが付けられ、宗教性に於ては、神のみが正しく、さらに神を必要とすることが人間の完全さのしるしであることを強調する。第九講話⁽²³⁾（一八四三年十二月）は同じく『回復』の問題と重要な関係を持っている。時間的なものと永遠的なものの関係が追求され、絶望に於て獲得される信仰的な魂は、神の所有物であって、実存は自己の魂の安らぎとしての永遠をわがものとすべく努力せねばならないことが示される。第十講話⁽²⁴⁾（一八四四年三月）は神の摂理に対する呼応性としての忍耐を語る。第十一講話⁽²⁵⁾（一八四四年三月）は信仰によって貧困や悲哀は永遠の期待へと変化すると語る。第十二講話⁽²⁶⁾（一八四四年六月）は真理としての宗教性は客観的なものではなく、主体的なものであることを示す。第十三講話⁽²⁷⁾（一八四四年六月）は重要である。テーマは「永遠の浄福への期待」である。人間であることは時間と永遠に含まれることであり、信仰とは期待と言う状況の中で神と関わることである。永遠の浄語は何も時間的な保証が与えられない客観的不確実性である。実存とは時間の中で永遠的なものを期待的に関わることである。永遠は時間の無限化ではなく、永遠の浄福に於けるよろこびは、過去もなく、未来もなく、神との完全な現在である。永遠に於ては実存がない。第十四講話⁽²⁸⁾（一八四四年六月）はイエス到来をつげるバプティスト・ヨハネの叫びを取扱っている。第十五講話⁽²⁹⁾（一八四四年八月）は倫理―宗教的建揚の概念を深く追求している。神との関係への人間の渴望と人間の自己自身のとりもどしに対する神の方法は奇妙である。魂と精神としての人間自身によって、人間は自己自身を支配することができない。人間は本来性をとりもどすために精神から生まれねばならず、この新しい精神そのものが神への応答を通して自己自身を支配する。その際精神が人間自身のとりもどしにして神の愛による犠牲となる間に、外面的自己は無にならなければならない。これが倫理―宗教的建揚なのである。

第十六講話⁽³⁰⁾（一八四四年八月）に於ては宗教性Aによって提示される「責め」としての「とげ」（苦悩）は不安や、

時間と永遠の危機的緊張から生ずることが語られ、苦悩と責めは、その否定性が指示する救済との関係の中で考えられる時のみ、実存のとりもどしのために有効である。第十七講話⁽³¹⁾（一八四四年三月）に於ては臆病が人間が責めと信仰との間の緊張の中で守られねばならない大きな危険があることが示され、逆に勇氣は内面性への沈黙にもどることによって産みだされ、自己の実存回復への契機である。第十八講話⁽³²⁾（一八四四年三月）は信仰に於て実存に保証されるものは永遠の不変性を持つ内面性であり、神そのものは人間の関わるただ一つのふさわしい対象であると語る。

以上の『講話』の内容から明らかな様に、「倫理—宗教的建揚は、実存の宗教性Aに向つての美的—倫理的な実存の否定と、宗教性に於て現われる信仰、救済、内面化、絶望などへの弁証法的関係である。

二、宗教性Aとしての建揚

これを『後書』（一八四六年）及び『キリスト教的講話』（一八四八年）によって構成する。「建揚的なものは何か？その最初の解答はおそるべきもの（det Forterdende）である。」「責め意識の内面性に対するおその強さは、建揚に対する比例関係にある。⁽³³⁾」「建揚的なものが全ての宗教性に対する本質的な述語である限り、宗教性Aもまたその固有の建揚的なものを持つだろう。⁽³⁴⁾」こうして建揚的なものは内在的なものであつて、まず美的なものに対する否定であり、美的な自己自身を排除する絶滅作用である。「これは自己の内に神—関係を見出し、この神—関係へ徹底的に苦悩しつつ沈み、そこに基底を求める。⁽³⁵⁾」従つて宗教性Aとしての建揚は宗教性Bへの建揚のための土台であり、まず美的—倫理的実存の成立する基底を根こそぎにすることであり、高まるとは深まることである。建揚するとは、まず実存の土台を逆説的に破壊することなのである。そうした上で「人は深く水を掘り下げるとき、それだけ掘った噴水は高くなる⁽³⁶⁾」のである。美的な立場から見れば、建揚的なものの位置は個人の外部にあり、個人がその場所を探求する。しかし倫理—宗教的な立場から見れば、個人が自己自身を絶滅した時、個人の实存の中に建揚的なものを

見出すのである。⁽³⁶⁾

すべて建揚が成立するためには、なによりもまず「おそれ」(Forfeclage)が土台としてなくてはならない。⁽³⁷⁾それなくしては、建揚は幻想に終るだろう。「おそれ」は実存的個人の内面性に新たな次元を切り開く、これが宗教性Aとしての建揚である。ここでは倫理的象面が妨害の役にまわり、建揚はその否定性となる。「建揚的なものとは、あの緊張した対立関係を止揚することにあるのではなく、むしろこれを精神的にはげまされて最後まで耐え忍ぶ勇氣によって、いわば棚上げにしてしまうこと、ここにこそ建揚的立場の面目がある」⁽³⁸⁾。

三、宗教性Bとしての建揚

「実存を罪として逆説的に表現し、又永遠の真理を時間の中で生成した逆説として把握すること、換言して、キリスト教的な意味に於ける宗教的真理として決定的要素は、それらの建揚的講話の中には見出されない」⁽³⁹⁾。宗教性Bとしての建揚もしくは逆説的建揚が登場するのは、実存が何かその外部のものとの接触によるのである。それは逆説であり、時間の内なる神、神人などと規定される本来のキリスト教的なものである。宗教性Aに於ける建揚は、実存の中で神と関係を発見しようとする努力の契機であったが、ここで再び実存の外部のものとの関係が問題とされるのである。一点にまで集中されたイエス・キリストの理解、つまり逆説としての神人と言う思想が、宗教性Bには前提されている。「建揚」はここで始めて土台を得て地上にうち建てられる。しかしその場合も、「時間の内なる神」との関係によって実存の内面に生ずる罪の超越と言う否定性が仲介されているのではあるが。

宗教性Aの建揚としての「おそれ」は、罪とその赦しとしての逆説としての「おそれの中に入り込み、建揚的なものはまさに最初の一瞥では敵と思われたもの、つまりおそれが建揚の前提となり、その従者となり、その友となる程に勝利にみちたものである。医者が人を殺す毒物を薬剤に変えるように、かくて更に輝かしい方法で建揚的なものに

於ておそれが建揚に変わるのである。⁽⁴⁰⁾」こう『キリスト教的講話』(一八四八年)の中で言われる。世故とか悲哀とかは世俗的な意味での救済の必要があるが、決してキリスト教的建揚を要求することは許されない。キリスト教的なのは、人間的な苦悩がどれ程大きかろうとも、慰めによって無限に増大させられ、絶望にまで致らしめられるのを知るときにはじめて、始まるからである。キリスト教的な慰めは地上最大の不幸よりさらに絶望に近い。「こうして建揚は、主の御名を衣せられて」、キリスト教的建揚(den christelinge Opbyggelse)がここに始まるのである。⁽⁴¹⁾」

以上見てきたように宗教性Bとしての建揚は救済の出来事としての啓示と、実存の逆説的な関係の中での建揚であり、キェルケゴールが名付けた逆説的建揚である。その運動は罪としての絶望が単に神の前にある(宗教性A)だけではなく、主体的決断によって逆説を信じ、そこに生ずる罪からの解放が与えられるのである。即自的であった倫理宗教的な建揚が、対自的な宗教性Aとしての建揚(否定性)をへて結合としての宗教性B(否定の否定)としての建揚へと発展したのだとも言い得る。ここで建揚は神の絶対的愛であり、それと絶対的に関係する宗教的実存の肯定と言う逆説的人間愛への展開である。キリスト教信仰である。

四、宗教性Bからの還相的建揚

さらに『死に至る病』(一八四九年)は直接的実存の絶望の問題を臨床的に提示しようとするが、この著作の副題は「建揚と覚醒のためのキリスト教的心理学的論述」⁽⁴²⁾である。そこでは人生に対するキリスト教的なものとの関係、つまり、「キリスト教的なものとのこの倫理的側面、これがとりもなおさず建揚的なものであって……冷淡なのが特徴的である学問的態度とは全く質的に異っている」⁽⁴³⁾のである。これは第二倫理学の問題の提示であって、我々が規定する宗教性Bからの還相的建揚への照明である。「キリスト教的認識はすべて、その形式がどれ程厳密であらうとも、配慮されたもの(Belymning)でなければならない、そしてこの配慮こそ、まさに建揚的なものである」⁽⁴⁴⁾。そして

この配慮は実存的現実に対する関係であり、「キリスト教的には真剣さと言う語がこれに相当する。」⁽⁴⁵⁾こうして『死に至る病』に於ては「宗教性Bからの建揚はキリスト教的配慮としての真剣さであると言い得る。しかもこの概念は『キリスト教への修練』(一八五〇年)に於ける同時性の概念にまで進展して行くものである。つまり建揚の概念の弁証法は上昇とか深化をともないつつ、美的なものに對するものからこまでたどられ得るのである。

さて、「宗教性Bからの建揚」概念のキェルケゴールによる最もすぐれた思想提示は、『愛のわざ』(一八四七年)の第二部の一の「だが愛は建揚する」⁽⁴⁶⁾に於て行われている。ここでキェルケゴールは opbygge の言語分析を行い、その語が「上に建てる」を意味し、建てるとは土台から建てることであつて、上に建てるとは高さと同時に深さをも示していると理解する。「愛は建揚する」とは愛よりも建揚が集合的に大であることを意味するであろうが、それにも拘わらず、宗教性Bからみれば「建揚することはもっぱら愛にのみ固有である。」⁽⁴⁷⁾「建揚的なものがあるところに愛があり、愛があるにたるところに建揚的なものがある。」⁽⁴⁸⁾精神的な意味で土台としての建揚は愛である。「愛は全てのものの源泉であり、精神的な意味で、愛は精神生活の最も深い基盤である。」⁽⁴⁹⁾土台が愛であり、しかも築かるべき建物は、再び愛である。つまり、建揚とは愛の最も固有の規定である。「愛を取り去れ！そうすれば建揚するものは何もなく、建揚される者もなくなるだろう。」⁽⁵⁰⁾このようにして宗教性Aのおそれをもって実存的に建揚された者は、絶望のただ中であつて把んだ建揚は再び還相面として「愛すべし」と言う厳格な命令となつて倫理—宗教的段階、もしくは美の段階へともどってくるのである。「真の建揚」は強調して言えば、最も深い意味で、この「愛すべし」であり、それが絶望からの救いなのである。⁽⁵¹⁾

結

以上キェルケゴールの四つの段階をもつ「建揚」の概念を吟味したのであるが、これらによって「建揚」の概念

が、初期思想から後期までのキェルケゴールの思想発展の中で、確固とした導きの糸であり、しかも極めて有力な一貫性を持った概念であって、極言すれば、キェルケゴール理解には不可欠な概念であることが充分に提示され得たと考へる。

註 使用されたキェルケゴールの原典は S. Kierkegaard Samlede Værker, udg. of A. B. Drachmann, J. L. Heiberg og H. O. Lange, Gyldendal, 1964, Bd. 1-20 である。最初に巻数「6」の次に頁数を記した。

- (1) SV³. 10 の 263.
- (2) 大谷寛氏、小川圭治氏、飯島宗孝氏など。
- (3) cf. SV³. 3 の 319, 3 の 320, 3 の 321.
- (4) SV³. 3 の 322.
- (5) SV³. 3 の 324.
- (6) SV³. 10 の 230.
- (7) Pap XIA 510.
- (8) cf. SV³. 8 の 227.
- (9) SV³. 9 の 214.
- (10) A. Paulsen, Das Verhältnis des Erbaulich zum Christlichen i Kierkegaardian, VI 1966, S. 99.
- (11) SV³. 18 の 160.
- (12) SV³. 9 の 214.
- (13) H. Schrøer, Kierkegaards Oplyggelige Taler og vor tids Kirkelige for kyndelse i Kierkegaardiana, VI. 1966, S. 116.
- (14) cf. SV³. 4 の 26 ff.
- (15) G. E. Arbaugh and G. B. Arbaugh, Kierkegaard's Authorship. 1968, p. 93.
- (16) SV³. 4 の 35 ff.
- (17) SV³. 4 の 57.
- (18) SV³. 4 の 69.
- (19) Arbaugh p. 117.

(20)	SV³. 4 の 78.	(47)	SV³. 12 の 206.
(21)	SV³. 4 の 103.	(48)	SV³. 12 の 208.
(22)	SV³. 4 の 117 及 4 の 130.	(49)	SV³. 12 の 209.
(23)	SV³. 4 の 145.	(50)	SV³. 12 の 217.
(24)	SV³. 4 の 165.	(51)	SV³. 12 の 47.
(25)	SV³. 4 の 185.		
(26)	SV³. 4 の 211.		
(27)	SV³. 4 の 227.		
(28)	SV³. 4 の 245.		
(29)	SV³. 4 の 265.		
(30)	SV³. 4 の 290.		
(31)	SV³. 4 の 307.		
(32)	SV³. 4 の 332.		
(33)	SV³. 13 の 96.		
(34)	SV³. 10 の 229.		
(35)	SV³. 13 の 96.		
(36)	SV³. 10 の 229,		
(37)	SV³. 9 の 216.		
(38)	SV³. 9 の 224.		
(39)	SV³. 9 の 224.		
(40)	SV³. 13 の 96.		
(41)	SV³. 13 の 97.		
(42)	SV³. 15 の 65.		
(43)	SV³. 15 の 67.		
(44)	SV³. 15 の 67.		
(45)	SV³. 15 の 67.		
(46)	SV³. 12 の 204.		